

ルーサン試作の生態観察(下)

福島県農業会議議員 農博 小 森 健 治

ルーサン栽培の五要点

すべて作物に、必要な栽培原則であるように、ルーサンにも栽培上必要な原則あるいは要点が、いくつかあるはずである。私はその任でないことはよく知っているが、教える人も、問題の提起をする人もないの

(1) 適地適品種の選択研究

最近アメリカを中心に、品種改良が著しく進み多くの新品種ができ、わが国にも輸入されてきた。筆者の昨年来試作を試みつつある品種とその特徴は次のごとくである。草地の地質をはじめ、放牧、採草あるいは、長期、短期、輪作用等その造成草地の目的によって、適地適草種の選択を考えねばならない。

バッファロー 暖地向き、耐病性強
グリム 寒地向き、線虫抵抗性強
デュビュイ 早生種直立型、輪作用向き
ライゾーマ 中生放牧専用型、ややホフク性

(写真は八月五日まき)

(2) ルーサンの特性と土地改良、

耕土改良

ルーサンは、排水よく、深い肥よくな土壌を好む。しかし今後残された草地造成予定地に、そのような自然地は少ない。従って人工的に土の改良を行なわねばならない。

A 酸性土壌をきらうので目標をPHで七度、すなわち中性弱アルカリ性土壌にまで改良すべく石灰の投入が必要である。

B リン酸欠乏土壌をきらう。従ってこの検定を行ない、所定の熔リンなどで、基礎改良を行なう。

C 土の肥よく化のために必要な、たいぎゅう肥、尿、および豚ふん、鶏ふん等の基礎的な投入が必要である。特に鶏ふんはよくルーサンの好む肥料だ。

(3) ルーサンの特性と施肥

耕土改良資材と、栽培肥料とを混同してはならない。牧草の王者ルーサンは、その生産栄養価が、赤クロバーのおよそ二倍といわれるだけに、肥料もじゅうぶんに施用する必要がある。標準としては成分量で、リン酸七_五、カリ五_五、チッ素三_五ぐらいが一応の目標だ。しかし次の諸点に留意する要がある。

A 肥料は金肥で成分量を満たすだけでなく、必ず自給肥料の堆厩肥、尿、豚・鶏ふん等を併用すること。

B ルーサンは直根性で、土中深くゴボイ根をおろす。従って一時には出来ないが、下層土をも、逐次改良してゆく必要がある。

C 刈り取りと追肥。刈り取ったら必ず追肥する。これも金肥だけでなく、自給肥料と併用する。追肥のいかんは、直ちに次の草の生産を左右する。

D 石灰も矯正用として一時多用しても、次第に流亡や、生産草に吸収されるので、追肥用としてわすれてはならない。

(4) ルーサン根粒菌の正確な接種

バートン博士の、マメ科牧草の根粒菌に関する研究が、本誌第十四巻第十一号で紹介された。この研究はまさに偉大な研究と賞賛したい。従来われわれは根粒に有効根粒と、無効根粒の存在を知らなかった。根粒が存在すれば、根粒菌は存在するものとの幼稚な考えであった。博士の研究を尊重すれば次の諸点に留意が必要。

A マメ科牧草の根粒菌の正確な接種には、まず系統別の根粒菌の育成と、販売とを直結する必要がある。

B 国および都道府県農試は、管内マメ科牧草の系統別根粒菌の育成培養を開始すべきである。

C 特にルーサンについては、わが国の土中に菌が皆無の状態であると推定されるので、今後の根粒菌の研究に期待する点が多い。

(5) ルーサンは単播単種(当分)

東北で、失敗例の多くは、オーチャード類との混ばんである。これはルーサンの稚苗時代の発育遅延という弱点を、早生で、集奪吸肥性の強い、しかも成育の迅速なオーチャードなどのために、圧倒されるためである。草には相対性と闘争性の二面がある。ルーサンを圧倒しないイネ科牧草の選択や、その方法等の研究が必要だが、当分はまず単ばん、特に施肥のじゅうぶんできる条播が安全。やむない場合はイネ科の草を極く少量にとどめる。

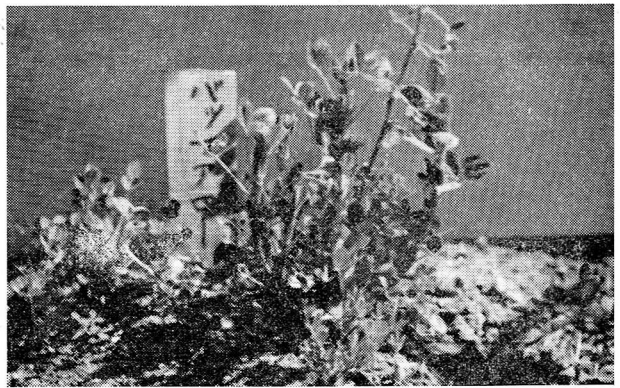
ルーサンと東北農政の課題

ルーサンはその特性として地下一層以上状態がよければ数層にも直根を伸ばす特性がある。従って暗きよ、盤層打破、混層耕等の重土改良の施行やこれらの機械化が、草地造成上必要だが、東北の草地造成には、いまだ農政上これらの機械の導入や、草地対照の助成方策が国として立っていないようだ。

結果は最少限必要とみられるメクラ暗きよ(排水管のない)も進められていない。この暗きよは、一は有効細菌類の生息源となり、一は乾燥期の貯水源となり、一は水の横流状態を上下動化するなどして、結果は下層土の団粒組織風化改良を促進し、有効微生物の生存を土中に多くして、ルーサンのような深根性牧草をして、じゅうぶんにその威力を発揮せしめる作用をする。これはもとより赤クロバー其他のマメ科牧草にも共通する。



向って左、デュビユイ、点々と白点の見えるのが根粒菌。その約60%に、モモ色の小さな斑点がある。これが有効根粒になりそうだ。約40%には今のところ白色でやや小粒。今後の変化を追求したい。向って右はグリム種根粒状況はほぼ前者に同じ。



バッファロー 一冬の成績だが、やや寒気に弱い傾向



グリム 草たけはひくいが成育よく、繁茂型だ



デュビユイ 成育旺盛、適品種のようだ



ライゾーマ ほふく型、輪形型となり、中心に直立茎も出る。さすがに放牧場向で、根は生育が深く広い

東北各県にみるリンゴ園の、穴掘堆肥ツボの有効な原理は、前にのべた「メクラ暗きよ」の原理に共通するが、これらの助成は東北農政上の重要課題だ。

いくつかのべール

ルーサン栽培の要点を以上五点にまとめしてみた。しかしなお多くのべールがルーサンを覆っている。これを一枚一枚はがしてゆくの、ルーサンを愛する者の任務だ。

(1) ヨーロッパの原産で、同じ白人の開拓したアメリカでルーサン栽培の盛期を迎えるのに百二十〜百三十年かかっている。

(2) アメリカから日本に渡来して既に百年。主対照地の北海道でも、今日わずかに

ルーサンミール工場が二つ。大雪山ろくのみ美瑛町と、オホーツク海面区の小清水町にできただけ。

(3) ルーサンの好きな、リン酸を不可給態にする地帯は、東北にも、北海道にも多い。例をあげると青森県下北半島の一角田

山山ろくのみリン酸吸収系数四千以上。苦心惨たん結局乳牛に養鶏を加えた経営方式で克服して今日を築いた。この例はデンマークが不毛の荒野を、沃土に化した、初期酪農の経営方式だ。今は単純経営時代だが、ルーサンを見ていると、乳牛と養鶏、養豚をやった当時のデンマーク農家の人々の心がわかるような気がする。